山と花のたより　184号

２０１５年１１月１５日　松尾忠

メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
ＨＰ　http://www1.ocn.ne.jp/~yamahana/

←ヤマシロギク（二上山）

山歩き―移ろいゆく秋を愉しむ

健生会友の会山歩きクラブが月一回の初級山行を実施しだして５ケ月が経過した。この間の初級山行の目的地は二上山３回（それぞれコースを変えて）、高取城址、大阪・岩湧（いわわき）山だが、どの山行も多くの会員と共に新しいメンバーが参加しており、クラブ会員の増加にもつながっている。

友の会の内外を問わず、山に登りたい、自然に親しみたいとの要求は強くあり、こうした願いに如何に応えるか、私たちのクラブにとっても無視できない大きな課題である。

各地の山を歩いて

私もこれらの例会に参加したし、二上山早朝登山も続けている。又、夏から秋にかけて、県内の山々だけでなく、群馬県の赤城山、荒船山、長野県の八ヶ岳・赤岳や入笠山、静岡県の沼津アルプスと愛鷹（あしたか）山なども歩いた。さらに１０月下旬、クラブ例会で山梨県の金峰（きんぷ）山と瑞牆（みずがき）山にも登った。どの山もそれぞれ特長があり、その場所、その時ならではの感動があった。そうした感動が永い山歩きの思い出に新たなページを付け加えてくれたし、御一緒した同好の人たちとの語らいも楽しく、有意義だった。

（二上山）ゴンズイの実↑

二上山のすばらしさを再認識

しかし、これらの山歩きの中で、改めて二上山の自然の豊かさを再認識させられている。二上山は花の種類も数も多いのである。キノコの種の同定は私には数えるほどしか出来ないが、その種類も多様でそれぞれの固体数も多いのだ。

今、山容全体を染めつつある紅葉も見事だと思う。二上山は身近にある得難い名山と言える。

シマカンギク（二上山）→

季節の移ろいに少し乱れが

今年の夏から秋への移ろいにはやや乱れがあった。夏らしい時期が短かったし、１０月になって真夏日がぶり返すかと思えば、ストーブを慌てて取り出すような寒気が突然来たりした。

この「乱れ」への順応に人間の体も戸惑いがちだったが、自然界でも例年にない現象が生じた。

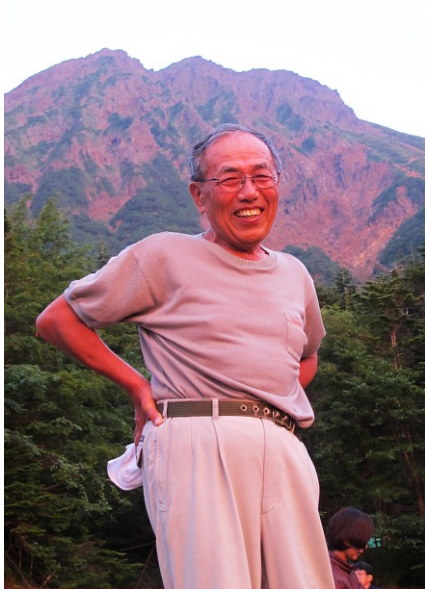
何カ所かで春の花モチツツジが花を見せた。いわゆる「狂い咲き」「返り咲き」の類だ。晩秋から初冬にかけて咲くテイショウソウは故田中澄江氏が「二上山の花」として紹介した植物だ

←キチジョウソウ（二上山）

が、今年は早くから花を開き、１０月下旬には花を散らしてしまった。めでたい花とされるキチジョウソウも開花が早く、11 月８日の立冬にはあの可愛らしい花が見られなくなった。

そして今、山路を飾っているのは冬の花サザンカが散り敷く沢山の淡紅色の花びらなのだ。

とは言っても季節は確実に歩を進めて夏を送り、秋の気配を深めつつ、冬へと向かっている。行きつ戻りつのその歩みも、いかにも行く秋を惜しむ自然界の**心くばり**のように思えて、「いつもありがとう」とつぶやきたくなる。



←筆者・赤岳バックに

テントの中から見た早暁の富士山→

（9 月 30 日愛鷹山系越前岳）

「ハリガネムシの怪」　ふたたび

４年前、私は健生会友の会の「ふれあい広場」に「ハリガネムシの怪」と題する小雑文を書いた。そこでは 20～30 ㎝もあるハリガネムシがカマキリムシに寄生していること自体不思議なうえに、水中生活者のハリガネムシが陸生昆虫の体内にどうやって入るのか、カマキリは夏が終わればその生涯を終えるのだが、その際ハリガネムシはどのようにして水中に戻るのか、などの「不思議」を列挙して、「これらの怪をどなたか解明してほしい」との無責任な文章で雑文を閉じたのだった。

若い研究者の意欲的とりくみ

１０月２９日（木）付朝日新聞「科学」欄に「寄生生物ハリガネムシとは」との見出しで神戸大佐藤拓哉准教授の記事が載った。佐藤さんはカマドウマ（バッタの仲間の昆虫）に寄生するハリガネムシの研究をしていると言う。

佐藤さんは奈良県の渓流に棲むイワナやアマゴの生態研究中に、秋、カマドウマが盛んに川に飛び込んでは魚に食べられるが、その際カマドウマからハリガネムシが水中に脱すること、イワナの年間エネルギー摂取量の６割をカマドウマが占めることなどを突き止め、この３種の生物の不思議な生態・関係が森と川の生態系に重要な役割を演じているとしている。

↓ハリガネムシ

寄生生物が宿主（カマキリやカマドウマなど）を操るという現在注目されているテーマへの意欲的な研究として見守りたいと思う。

ハリガネムシは今でも二上山登山口の祐泉寺横の渓流で容易に見られるし（左の写真）、時々林道や登山道の路上でも見かける。